

古典×現代 2020 時空を超える日本のアート

国立新美術館 2020.03.11～06.01



本展は、江戸時代以前の「絵画」「仏像」「陶芸」「刀剣」の名品を、現代を生きる「8人」の作家の作品と対になるよう組み合わせ、一組ずつ8か所の展示場で構成されている。古典側は「蕭白」「乾山」「円空」「仙厓」「北斎」ら誰もが知る巨匠の作品や、鎌倉時代の「仏像」、江戸時代の「花鳥図」に「刀剣」の名品。現代側は「川内倫子」「鴨池朋子」「しりあがり寿」「菅木志雄」「柳田康司」「田根剛」「皆川明」「横尾忠則」らの今日の日本を代表するクリエイターが選ばれている。

曾我蕭白 《柳下鬼女図屏風（りゅうかきじょずびょうぶ）》 江戸時代



鬼と化した女の荒涼とした心象風景を描いた作品の「部分」で、夫に捨てられた女が鉄輪を頭に巻き生霊と化す謡曲「鉄輪」が元祖であるとする説がある。

吹き付ける寒風に揺らめく枯柳の傍らで、髪を振り乱して立つ鬼女が描かれているが、衣の一部のほかに口腔に赤味を加えて鬼女は凄さを増している。

しかし、しなやかに伸びた細見の手足は、この鬼女の前世の美しさ高貴さを暗示しているように見える。

鬼女の恐ろしげな顔が子供を振るえさせたのか、引っかけられて損なわれているのが惜しい。

葛飾北斎 《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》 江戸時代

しりあがり寿 《ちょっと可笑しなぼぼ三十六景 太陽から見た地球》 2017年

